

評価のポイント

CL-1.看護実践能力：ケアする力

[34-1] 「ショック」の基本的病態生理と回復過程

<患者情報> H・Jさん 33歳 男性

生来健康であり、既往歴なし

11月9日、Hさんは、趣味のラグビーの試合に出場していた。

試合中の激しい転倒により、Hさんは負傷した。

腰を強く打っており、Hさんは起き上がることもできない状況であったため、仲間より救急要請。当院へ搬送された。

<搬送時の状態> NIBP：120/70 mmHg 心拍数：100回/分 洞調律 体温：36.0℃

呼吸回数：15回/分 SpO₂：98%（Room Air）

右腰部に変形あり、打撲痕あり、動揺を認める。FASTにてダグラス窩に液体貯留を認める。

意識レベル：清明 S「腰が痛いんだよー。ラグビーの試合でさ、大したことないでしょ？」

顔色は、少し青白い。皮膚は冷たい。

<搬送から10分後の状態> NIBP：78/34 mmHg 心拍数：129回/分 洞調律 体温：35.7℃

呼吸回数：27回/分 SpO₂：93%（Room Air）

意識レベル：JCSⅡ-10 S「うーん・・・」

顔面蒼白、皮膚は冷たく湿っている。

1. この事例はショックの5Pのどれに当てはまるでしょうか？

2. ショックの病態と重症度を判定してみましょう。

ショックの5徴候

1. 顔面蒼白
2. 虚脱
3. 冷汗
4. 脈拍触知不能
5. 呼吸不全

事例においては1.2.3.5.が該当する。

事例は出血性ショックであり、出血部位の特定と早急な治療が必要となっている。

外傷、FASTの所見では右腰部に変形あり、打撲痕あり、動揺を認める。FASTにてダグラス窩に液体貯留を認める。

このことから骨盤骨折、腹腔内臓器損傷、血管損傷が疑われる。

ショック指数は、1.5～2.0であり「重症」と判断できる。

治療としては、輸液療法：細胞外液輸液（乳酸リンゲル液、酢酸リンゲル液）代用血漿剤（ヘスパンダー®、低分子デキストラン）輸血療法：赤血球液、新鮮凍結血漿、濃厚血小板、酸素投与が行われる。出血に対する輸液や輸血を行うことで、循環・呼吸を維持し、その間に止血処置を行う。